

世界の大学の国際化の諸相

－ 傍流から大学の重要課題へと変貌した「大学の国際化」－

船守 美穂 （東京大学国際連携本部）

- ・ 「大学の国際化（Internationalization）」が世界各国の大学の重要課題となりつつある。
- ・ 国際化の進展に伴う学内外のニーズに大学が対応する必要性が生じていること、国際的通用性を有していることが大学の存続にとって重大な意味を持つようになってきていること、国際化が大学の重要な収入源となりうるようになってきたこと、などが理由として挙げられる。これは、社会との連携、社会からの要請への対応を通じて大学の存在が成立する 21 世紀の大学像と呼応している。
- ・ 大学の国際化を重要課題と受け止めている日本の大学はいまだ一部の大学に留まっている。この状況は早々には変化しないであろう。他方、世界において「大学の国際化」が外部資金導入や世界拠点へと飛躍する手段となりうることに鑑みると、これをより戦略的に模索する大学が増えてもよい。

はじめに

「大学の国際化（Internationalization）」が世界各国の大学の重要課題となりつつある。

大学の国際戦略が策定され、あるいは戦略として明文化されないまでも学長のリーダーシップが発揮され、国際化が自覚的に多数の大学で推進されている。これまで国際担当部署が存在しなかった英語圏の大学にもそのような部署が新設・増強されるケースが散見される。また、各種の国際レベルの学長会議などでも「大学の国際化」が頻繁にテーマとして取り上げられるようになってきている。

これまでの「大学の国際化」の多くは、国際競争力を強化したい政府の政策的意図に先導された活動か、あるいは国際交流に熱心な特定の教員や部局等に限定された活動か、どちらかであった。「国際化」の重要性や意義を認めつつも、十分な予算的措置が得られないこと、「国際化」より喫緊の課題が大学当局に多数存在していることなどの理由から、多くの大学が「国際化」に主体的に取り組めなかったといえる。組織的に「大学の国際化」が取り組まれていた場合でも、授業料収入を目的とした留学生の獲得や海外分校の設置、またはエラスムス計画や語学研修等を兼ねた学生交流・派遣の推進に過ぎなかった。ところが近年では世界各国の大学が「大学の国際化」を、大学当局が主体的に取り組まなければならない重要課題として、扱い始めている。

他方、「大学の国際化」が各国の大学の重要課題になっているといっても、その具体的な内容は各国あるいは各大学のおかれた状況によって実に様々である。以下に紹介するように、「大学の国際化」という同じ言葉が用いられていても、その内容だけでなく、その背景や動機もしばしば異なっている。

このような「大学の国際化」の動きをどのように理解すべきか？なぜ「大学の国際化」が大学当局の、しかも英語圏や世界トップクラスの大学の、重要課題として急浮上しつつあるのか？本稿では、世界の大学の国際化に向けた取り組みとその背景を分析し、そのような潮流の背景について新しい視座を提供する。

世界の大学の国際化の動向の分析

世界の大学の国際化に向けた取り組みには、教育の国際化を図る取り組み、研究力の強化を図る取り組み、大学の国際的プレゼンスを強化する取り組みなど、様々な方向性がある。これらの取り組みは旧来より各大学で行われているが、その背景となる動機には大きな変容が見られる。

従来、大学の「国際化」あるいは「国際関係」は、欧米先進諸国にとって、学術交流や国際協力などの目的、あるいは学生の国際的視野の醸成など教育的配慮を念頭に置いたものであった。欧米先進諸国に追いつこうとするアジアなどの諸国にとっては、教育研究等学術の水準を向上させ、欧米先進諸国に比肩する地位を占めたいという動機がこれに加わる。全世界で共通に理解・共有されうるといふ学術の本質（＝国際性）から生じた動きであり、ここにおける「大学の国際化」は個々の教員の自然発生的な内的欲求から生まれていると考えられる。

これに対して、近年の「大学の国際化」は外的圧力によって加速されているように見える。例えば、学生交流について見れば、EU 統合とともに大学卒業後の就職先や就業活動の範囲が EU 全域に広がったため、欧州を中心に在学中の留学経験が就職に有利に働くようになり、学生側からの留学ニーズが高まっている。また、米国では、世代を経た移民者の子孫において、出身国の言語を習得・維持したいというニーズや、出身国へ留学したいというニーズが高まっている。このように、国内の国際化の進行が大学の国際化を促すという流れがある。

「大学の国際化」を促しているのは学生や社会からのニーズだけではない。グローバル化の進行とともに、大学の国際的通用性も大学評価の視点に加わってきた。これも、大学が国際化に力を入れる要因の一つとなっている。これまで大学への収入を安定的に確保するためには、大学自身が立地する国の中のみで、国およ

び社会から一定の支持を得たり相応の評価を確立したりすれば十分であった。ところが、大学の国際的通用性が（世界だけでなく）「国内における」大学の評価の視点として近年入り込んできたことから、大学（特に各国の有力校）は自らの存続のために国際的通用性の獲得に力を入れざるを得なくなったといえる。

もう一つは、前述のような外圧を受けての国際化ではなく、逆に、「国際化」を逆手にとって、資金の獲得や世界拠点への飛躍を図ろうとする流れである。授業料収入を目的として留学生を獲得しようとする動きや世界レベルの有力校を誘致し世界的な教育ハブとして展開しようとする動きがある。また近年では、米国の世界トップクラスの有力校が学長主導で国際化イニシアティブを推進している。ここでは、国際連携や学内の国際化の促進、あるいは、すでに実施されている関連の活動を社会にアピールすることにより、寄付金等の外部資金の導入を図っている。このように近年の「大学の国際化」は大学の内的欲求からではなく、大学と社会との相互連関から生じているといえる。下表に、「大学の国際化」に関連する諸活動ごとに、その底流にある背景・動機の変容をまとめた(括弧内は、米国・欧州・アジアを中心に、取り組みの多く見られる地域・国を諸活動ごとに表示している)。

表：世界の「大学の国際化」の諸活動と取り組みの背景の変容

「大学の国際化」の諸活動		取り組みの背景の変容
教育の国際化	学生交流・学生派遣プログラムの強化	親善目的・国際的視野の醸成への配慮から、学生、社会からの国際的キャパシティ・ビルディングに対する強いニーズへの対応（英国を含む欧州、米国、アジア）
	カリキュラムの国際化	国際的視野の醸成への配慮から、国内の人種的多様性への対応と国際的通用性のある教育の実現（欧州、米国）
	高等教育制度改革	国際的通用性のある高等教育制度への統一化（特に欧州）
	英語による教育の提供	留学生の獲得と国際的通用性のある教育の実現（非英語圏諸国）
教育産業としての展開	留学生受入と国境を越えた教育サービスの提供	親善目的・国際協力的目的から、授業料収入等財源確保（特に英語圏の大学）
	世界の教育ハブとしての展開	「国際化」を梃子にした世界拠点への飛躍（シンガポール、マレーシア、中東の諸国他）
国際競争力の強化	学生・教員の人の多様性の確保	国内学生の国際的視野の醸成への配慮から、世界への国際的教育環境の提供と国際的通用性のある大学としての証として
	優秀な外国人研究者の獲得と教職員交流の促進	国内の研究力の実質的強化から、即効的研究力の強化と国際的通用性のある大学としての証として（アジア、欧州）
	世界トップ拠点の形成	研究面の強化から、「選択と集中」と国際的通用性のある大学としての証として（アジア、欧州）
ユニバーシティ・グローバルへの道	国際連携・国際的ネットワークの強化	国際的通用性のある大学である証と世界各国からの人的・資金的リソース獲得の手段として（米国を含む世界の大学）
	国際的ヴィジビリティの確保・強化	国際的通用性のある大学である証と世界各国からの人的・資金的リソース獲得の手段として（米国を含む世界のトップ大学）
	地球規模の課題解決と国際化イニシアティブの推進	国際貢献目的から、国際的プレゼンスと世界各国からの人的・資金的リソース獲得の手段として（世界のトップ大学、特に米国）

「大学の国際化」と大学改革：日本の大学への示唆

「大学の国際化」が内的欲求から社会の要請に呼応した取り組みへと変化してきたことを示した。

現在、世界的に大学改革が進行しているが、これは「大学の自治」を超えて大学の運営を社会の要請に応える大学へと変革していく動きである。大学の財源を社会に求める高等教育財政の改革、それに伴う社会への説明責任の強化、高等教育の大衆化に伴う高等教育の市場化と競争原理の導入など、改革事項は様々であるが、21世紀の大学が社会との連携、社会の要請への対応を通じてのみ、存続できるようになってきた現状を反映している。

「大学の国際化」もまた大学改革の動きと呼応しており、多くの大学が必然性をもって取り組まなければいけない課題となってきた。 (英国を含む) 欧州および米国の一部の地域では、域内の国際化の進行とともに、ほぼすべての大学が「国際化」の波に巻き込まれている。英・豪などの大学では財源確保のために留学生獲得などに取組む必要もある。アジアや米国のトップ大学では、国内トップではもはや十分ではなく、自らの存続意義を社会に理解してもらい社会に維持・支援してもらうために、国際的通用性を有することが必要となっている。

これに対して日本では国内の国際化（人種的多様性、政治・行政・産業等における国際連携、これらに伴う政府・産業・国民等の国際化に関する意識の深化）が十分に進展していないこともあり外圧もさほど強くない。このため多くの日本の大学では「大学の国際化」が未だ必然性を伴う課題として認識されていない。この状況は早々には変化しないであろう。しかし、世界には「大学の国際化」を生かし外部資金の導入や国際的プレゼンスの強化につなげている事例がある。国際通用性が大学の本質であることに鑑みると、この道をより戦略的に模索する大学が出てきてもよいと考えられる。

世界の大学の国際化の諸相

— 傍流から大学の重要課題へと変貌した「大学の国際化」—

「大学の国際化」徹底分析

第10回 高等教育学会 1部会『大学の国際化』

東京大学国際連携本部 船守美穂

2007年5月27日

0. イントロダクション

- ・世界の大学の国際化の諸相
- ・問題提起

世界の大学の国際化の諸相...アジア

□ 高麗大学

- 2010年までに、講義の6割を英語に移行予定(*)。
- 新規に採用する教員は英語で講義をする。

□ ソウル国立大学

- 講義の英語による実施率を1割から2割に学部教育の学生交流の拡大

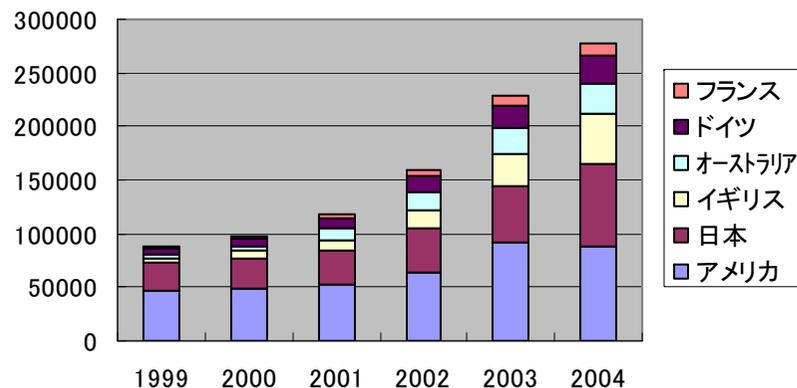
□ 日本

- 国際戦略本部強化事業
- 大学教育の国際化推進プログラム
- 先端的／戦略的国際連携支援
- グローバルCOE
- 世界拠点構想

□ 中国

- 211工程(1993-)
- 985工程(1998-)

中国人留学生の分布



世界の大学の国際化の諸相...欧州

□ ドイツ

- エクセレンス・イニシアティブ
- DAAD: 「国際的な大学への道 – DAAD第3次行動計画2004-2010」
*
- 優秀な学生等獲得のための積極的な海外展開、マーケティング活動
- 急速な英語化の流れ

□ EU

- ボローニャ・プロセス
- リスボン戦略
- エラスムス計画
- マリー・キュリー・アクション
- European Higher Education Area (欧州高等教育圏)

□ イギリス

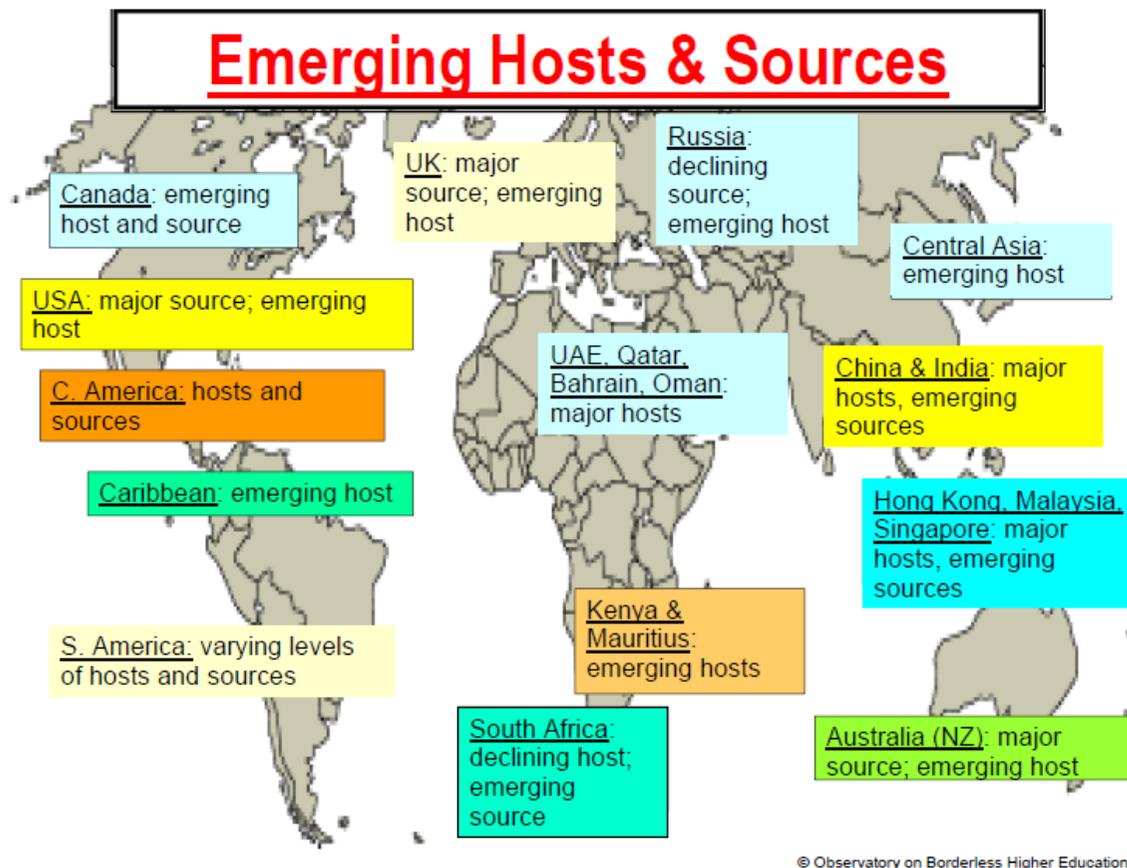
- 授業料収入
- 教育の国際化?

□ フランス

- (擬似的な)総合大学化の流れ
(Pôle de Recherche et d'Enseignement Supérieur (PRES) [研究・高等教育拠点])
- 英語のコースの提供

世界の大学の国際化の諸相...教育ハブ、オセアニア

- シンガポール、マレーシア、アラブ首長国連邦
 - 「世界の教育ハブ」戦略



(出典) 英国・Observatory on Borderless Higher Education
(http://www.obhe.ac.uk/resources/speeches/IAU_05.pdf)

- オーストラリア
 - 教育産業としての留学生誘致政策
 - 国境を越えた教育サービスの提供

世界の大学の国際化の諸相...米国

- (国家安全保障): 外国語教育、地域研究、異文化理解等
- キャンパスの国際化
(Campus Internationalization)
- カリキュラムの国際化
- 米国大学学部生・年間100万人留学計画(計画中)
- 「グローバル・ユニバーシティ」への道

The Internationalization of Yale

THE EMERGING FRAMEWORK

SINCE THE YALE CORPORATION devoted its Annual Retreat in 1997 to the topic of globalization, the internationalization efforts of the University have accelerated. Virtually every School and major academic unit has increased its international activities; the work of the Yale Center for International and Area Studies (YCIAS) has expanded dramatically; the World Fellows Program and the Center for the Study of Globalization have been launched; the Grand Strategy seminar has become a signature teaching program; and an array of initiatives to buttress the infrastructure for internationalization has been introduced (see box on page 8).

A goal for the last year has been to engage key members of our community to think about the strategic design for the internationalization efforts of each School and program, and to reflect upon the long-term

INTERNATIONALIZATION AS A RESPONSE TO THE OPPORTUNITIES AND CHALLENGES OF A CHANGING WORLD

Our efforts to create a global university start from the premise that the world has become increasingly interconnected – not simply economically and geographically but also in the experience of daily life, through the immediacy of events that are broadcast worldwide and through the confrontation of cultures, ideas, and values that are evident to all. If Yale is to pursue its historic mission of educating leaders in such a world, it must (1) develop sufficient curriculum in global and regional affairs so that students can equip themselves with the knowledge required of global citizens and leaders, (2) provide undergraduates, as well as graduate and professional students, opportunities to work or study abroad to broaden their appreciation of cultural differences as well as the globalizing forces at work today, and (3) open its doors to a sufficient representation of international students and scholars, both to have a direct stake in educating the leaders of other nations and to give U.S. students the opportunity to develop personal ties across a range of national cultures.

□ The Stanford Challenge:

Seeking Solutions

The Initiative on Human Health	\$500 M
The Initiative on the Environment and Sustainability	\$250 M
The International Initiative	\$250 M
Multidisciplinary Research Across the University	\$400 M

Educating Leaders

Improving K-12 Education	\$125 M
Engaging the Arts and Creativity	\$250 M
Reinventing Graduate Education	\$500 M
Extending the Renaissance in Undergraduate Education	\$300 M

Sustaining a Foundation of Excellence

Core Support	\$1.325 B
Annual Giving Across the University	\$400 M

Total: \$4.3 B

(問題提起)

1. 近年のこの「大学の国際化」とは
一体、何なのか？
2. どうして、大学本部が
「大学の国際化」の推進主体として浮上してきたのか？
3. どうして、「大学の国際化」は
世界で大流行することになったのか？

1. 近年のこの「大学の国際化」とは 一体、何なのか？

「大学の国際化」徹底分析

「大学の国際化」にかかわる様々なイメージ

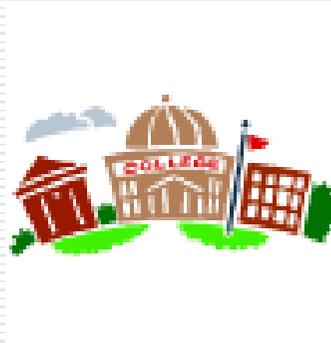
世界トップ
を狙う！

授業料
収入



国家
安全保障

留学生受入、
学生交流、
国際連携…



そもそも大
学は国際性
を有してい
るものであ
り…

教育ハブ

英語化
!!



カリキュラム
の国際化



分析の手法

- 「誰が」 (主体)
 - 「何のために」 (目的)
 - 「どのような活動を」 (活動内容)
- しているのか？

...最も具体的、かつ、明示的に観察される「活動内容」から、
それら活動の目的・背景を分析する。

大学の国際関連の諸活動

□ 人の交流

- 留学生の受入
- 学生の派遣
- 学生交流
- 外国人研究者の受入
- 研究者の派遣
- 研究者交流

□ 国際プロジェクトの推進

- 学術交流
- 国際シンポジウム
- 国際共同研究
- 地球規模の課題解決
- 国際産学官連携

□ 国際連携

- 国際ネットワークの形成
- 大学間協定の締結

□ 海外展開

- (国内)国際拠点の設置
- 海外有力校の誘致
- 海外拠点の設置

□ 国際教育

- 海外分校の設置・運営
- 教育サービスの提供
- 二重／共同学位プログラムの実施
- (学内)英語コースの開設・実施
- カリキュラムの国際化
- 語学講義の拡大・多様化
- 英語講義の拡大

□ 海外広報

- 国際広報・海外情報発信
- 国際ジャーナルの刊行

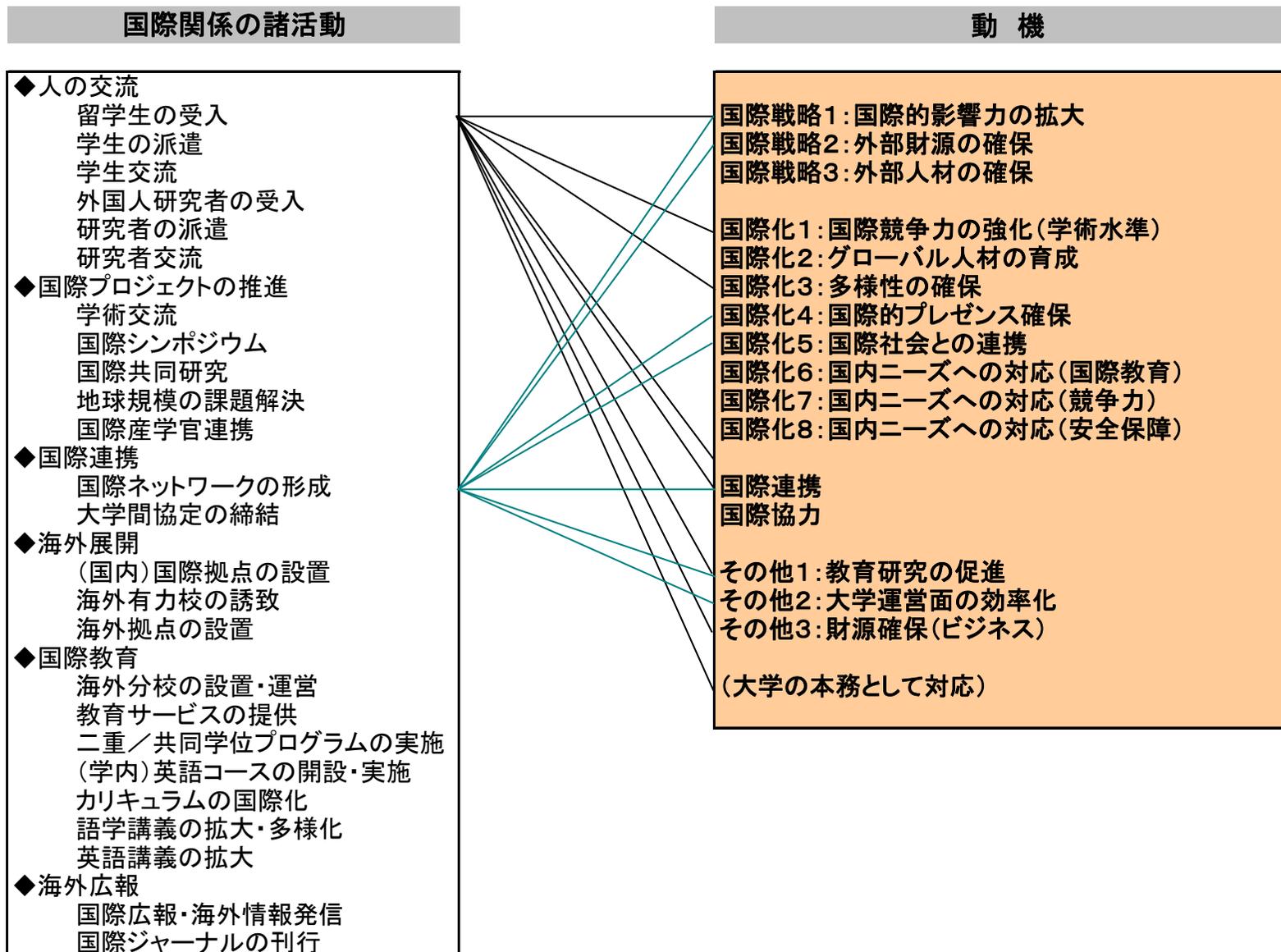
「国際関連活動」別の「大学の国際化」分析...分析例

活動内容	主体			目的	種類
留学生の受入	本部	部局	教員	大学・部局の学術水準向上	
留学生の受入	本部	部局	教員	学内の多様性の確保	
留学生の受入	本部	部局	(教員)	人的ネットワークの形成	
留学生の受入	本部	(部局)		財源確保	
留学生の受入	本部	部局	(教員)	国際協力	
留学生の受入	本部	部局	教員	(希望者の受入)	
留学生の受入		部局	教員	教育研究の推進	
留学生の受入		部局	教員	学術交流	
留学生の受入	本部			国家安全保障	

■
■
■
■

※ 他の「活動内容」別の分析については、別添1参照のこと。

「国際関連活動」別の「大学の国際化」分析 ...活動と動機の関連づけ(例示)



「大学の国際化」の動機のレベル

「大学の国際化」の分類

国際戦略1: 国際的影響力の拡大
国際戦略2: 外部財源の確保
国際戦略3: 外部人材の確保

大学の維持・発展のための一つの方策として行う「**戦略的行為**」

国際化1: 国際競争力の強化(学術水準)
国際化2: グローバル人材の育成
国際化3: 多様性の確保
国際化4: 国際的プレゼンス確保
国際化5: 国際社会との連携
国際化6: 国内ニーズへの対応(国際教育)
国際化7: 国内ニーズへの対応(競争力)
国際化8: 国内ニーズへの対応(安全保障)

国内的圧力により対応の必要性を迫られて行う「**対策的行為**」

国際連携
国際協力

「**無作為の行為**」

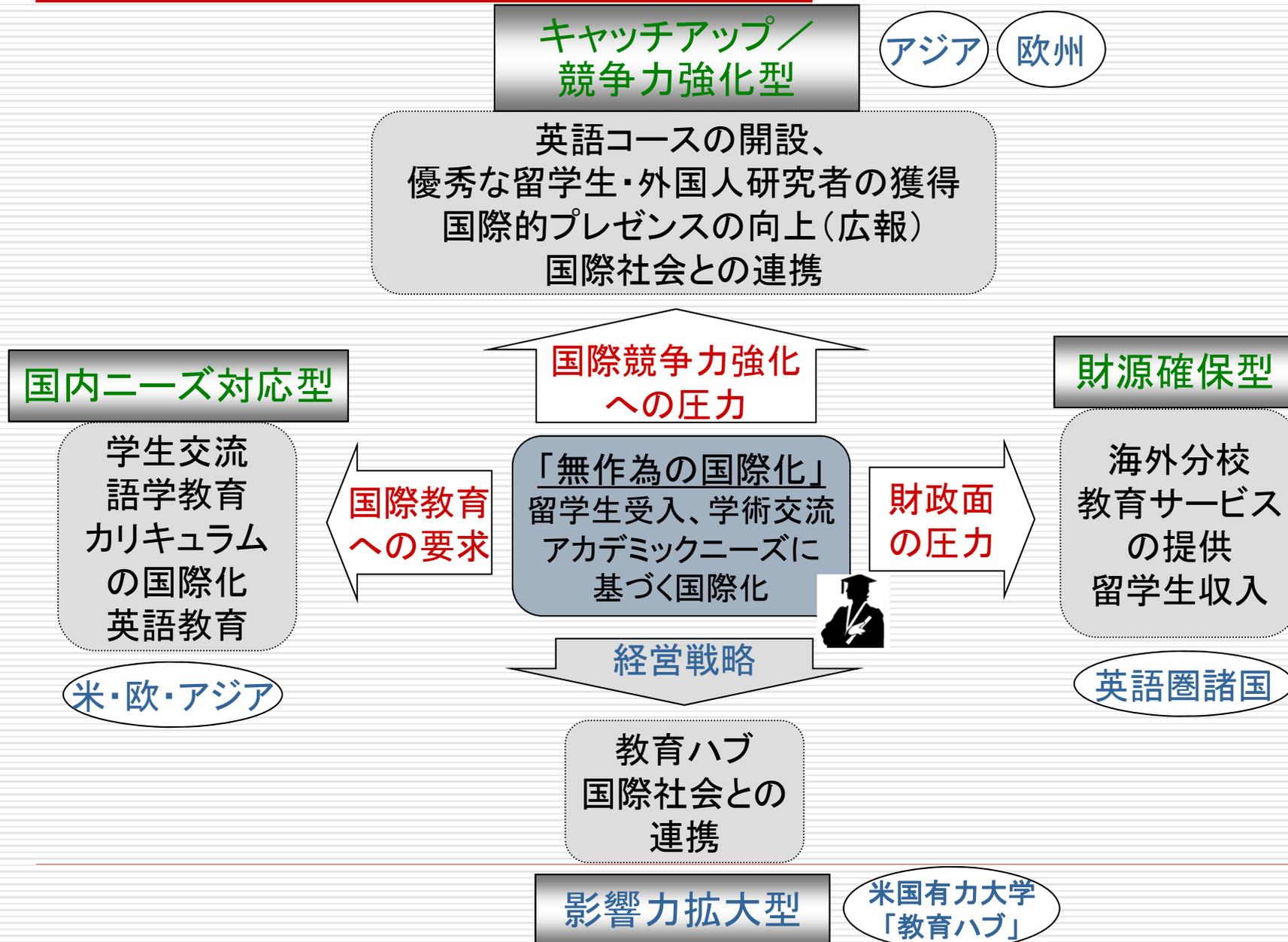
その他1: 教育研究の促進
その他2: 大学運営面の効率化
その他3: 財源確保(ビジネス)

大学本来の目的に対して行われる「**国際的な活動**」

(大学の本務として対応)

大学の「**本務**」としての行為

「大学の国際化」の地域特性



問題提起1. 「大学の国際化」とは一体、何なのか？(回答)

- 世界各国の「大学の国際化」への取り組みは、それぞれに異なる背景・動機をもつ。
- 地域・国ごとに背景・動機が異なるため、単に「取り組み」のみを見て、それを導入するのは危険である。
- 近年、世界で活発になっている「大学の国際化」は、
 - 従来からの、学術目的(アカデミックニーズ)に基づく取り組みから、
 - 国内ニーズの高まりへの対応(「国際競争力強化への圧力」「国際教育に対する要求」「財政面への圧力」)へと変容している。

近年の「大学の国際化」は、
国内ニーズの高まり(「経営戦略上の必要性」を含む)
に対する大学の対応努力の現れである。

2. どうして、大学本部が
「大学の国際化」の推進主体として浮上して
きたのか？

「取組主体」別の「大学の国際化」の分析...(1)

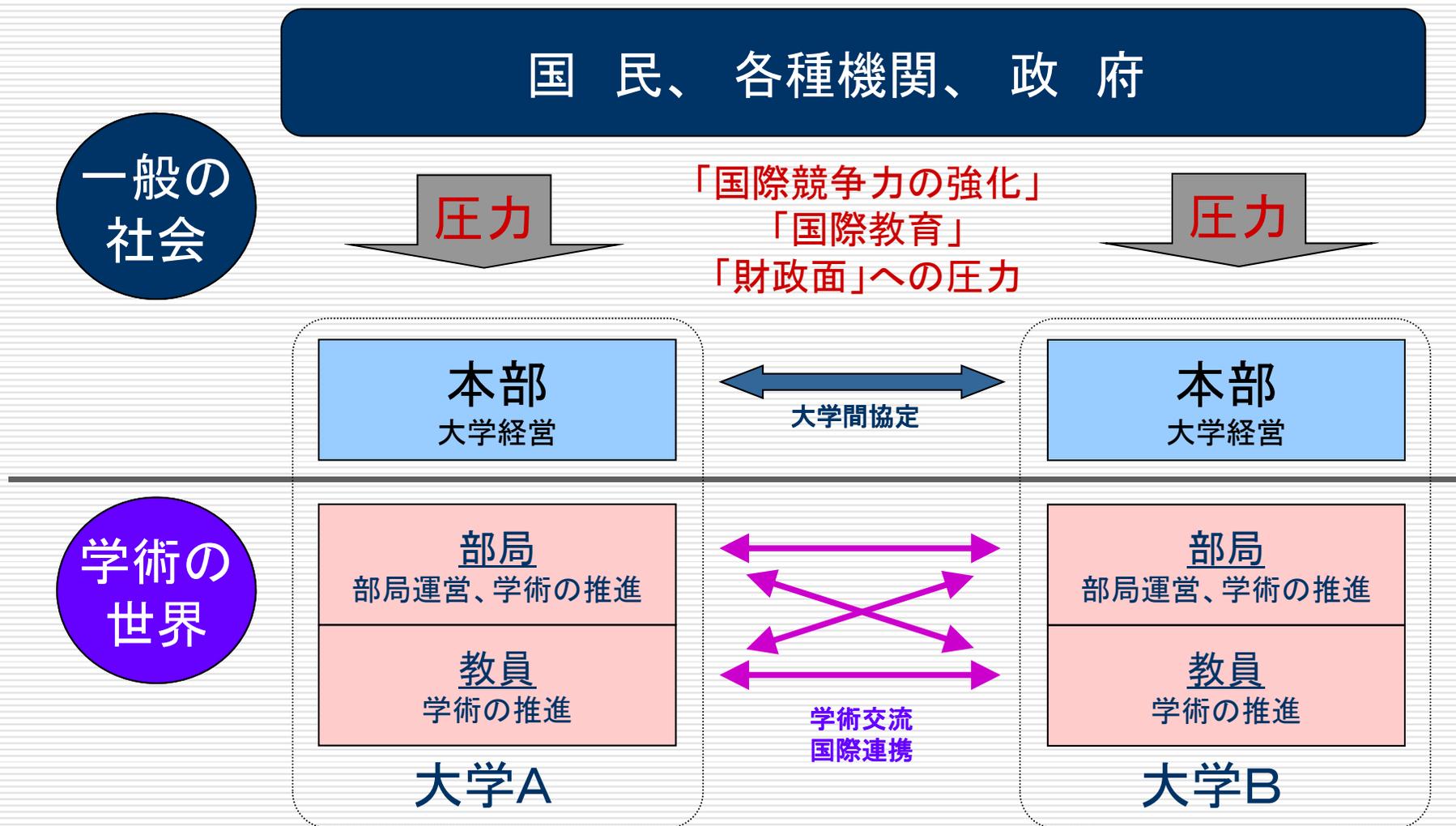
主体	活動	目的	視点
教員	学術交流 国際共同研究 フィールド調査 講義内容の国際化 留学生の受入 学生交換	教育研究の充実 教育研究の推進 教育研究の推進 教育研究の充実 教育研究の充実 教育研究の充実	●教育研究の推進・充実 (相手) ・教員／研究者 ・学生(入学希望者含む)
部局 (専攻)	国際共同研究プロジェクト 海外調査プロジェクト 国際産学官連携 学術交流 部局間協定 二重／共同学位プログラム 学生交流・派遣プログラム 語学教育(英語) 留学生の受入 英語コースの提供 研究者のリクルーティング 教育サービスの提供 遠隔教育 国際シンポジウム 海外拠点 国際ジャーナルの刊行 (学内)国際拠点の形成	教育研究プロジェクトの推進 教育研究プロジェクトの推進 教育研究プロジェクトの推進 部局としての教育研究内容の充実 部局としての教育研究内容の充実 部局としての教育研究内容の充実 部局としての教育研究内容の充実 部局としての教育研究内容の充実 人材確保 人材確保(優秀な留学生) 人材確保(優秀な研究者) 部局としての情報発信・財源確保・人材確保 部局としての情報発信・プレゼンス強化 部局としての情報発信・プレゼンス強化 部局としての情報発信・プレゼンス強化 部局の強み・特異性の形成 部局の強み・特異性の形成	●(特定分野の)教育研究拠点としての充実と、それを通じた部局運営の安泰化 (相手) ・他大学の「部局(専攻)」 ・教員／研究者 ・学生(入学希望者含む)

「取組主体」別の「大学の国際化」の分析... (2)

主体	活動	目的	視点
大学	大学間協定 学生交流・派遣プログラム 二重／共同学位プログラム カリキュラムの国際化 語学講義の拡大・多様化 留学生の受入 研究者のリクルーティング 英語コースの提供 教育サービスの提供 海外分校 大学間ネットワーク 国際シンポジウム 国際広報・海外情報発信 海外拠点(リエゾン・オフィス) 遠隔教育 地球規模の課題解決プロジェクト 国際産学官連携 海外有力校の誘致	大学としての教育研究内容の充実 大学としての教育研究内容の充実 大学としての教育研究内容の充実 大学としての教育研究内容の充実 大学としての教育研究内容の充実 本務として・財源確保・人材確保 人材確保(優秀な研究者) 人材確保(優秀な留学生) 人材確保・財源確保 人材確保・財源確保 大学としての情報発信・プレゼンス強化 大学としての情報発信・プレゼンス強化 大学としての情報発信・プレゼンス強化 大学としての情報発信・プレゼンス強化 大学としての情報発信・プレゼンス強化 大学としての強み・特異性の形成・明確化 大学としての強み・特異性の形成・明確化 大学としての強み・特異性の形成・明確化	●大学経営の安定化・強化を図るための: 1)教育研究内容の充実化 2)情報発信・プレゼンス強化 3)人材と財源の確保 4)経営の多角化と戦略的展開 (相手) ・社会(政府・国民) ・他大学 ・その他(民間・行政機関等)

※ 「主体」別の分析一覧については、別添2参照のこと。

「取組主体」別に見た「大学の国際化」



「大学本部」は、社会とのインターフェースになっている。

問題提起2. どうして、大学本部が

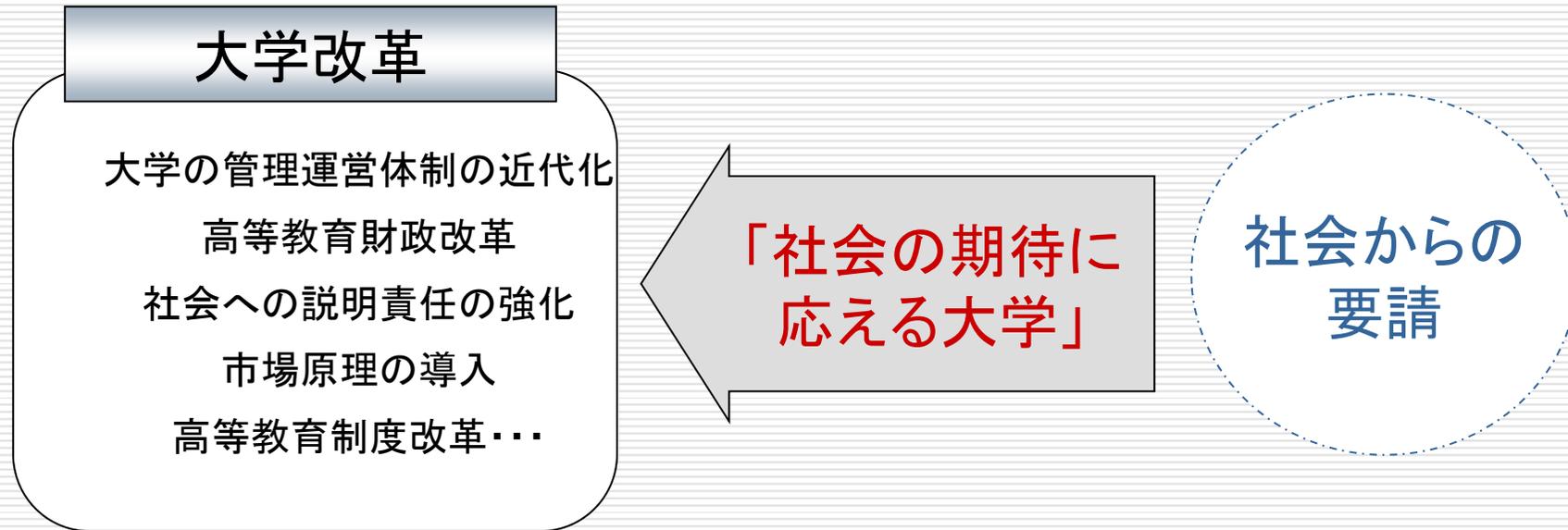
「大学の国際化」の推進主体として浮上してきたのか？（回答）

- 従来、「大学の国際化」は「教員個人」または「部局」を主体とする、学術目（アカデミックニーズ）に基づいて取り組まれていた。
- そこに近年、「社会（国民・政府等）」において、「大学の国際化」に対する国内ニーズが高まった。
- 社会の要求は、教員個人あるいは特定分野の部局ではなく、漠然と「大学」総体に向けられていた。
- このため、大学総体を代表する「大学本部」が必然的に、社会からの要求に応える立場にならざるを得なかった。

「社会（国民・政府等）」からの「大学の国際化」に対する要求が（教員個人・部局ではなく）大学当局に向けられたことから、大学本部が必然的に、社会からの要求に応える立場になった。

3. どうして、「大学の国際化」は
世界で大流行することになったのか？

(参考)世界的な大学改革の進行



□ 大学改革:

- 「大学の自治」を越えて、大学の運営を社会の要請に応える大学へと変革していく動き
- 21世紀の大学が社会との連携、社会の要請への対応を通じてのみ、存続できるようになってきた現状を反映

問題提起3. どうして、「大学の国際化」は 世界で大流行することになったのか？（回答）

- 世界に進行している大学改革は、大学が「大学が社会の要請に応える大学」となる変革のプロセスである。
- 「大学の国際化」もまた、社会からの要請に応える一つの動きであり、大学改革と同様に、大学が必然性をもって取り組まなければならない課題となっている。

- 世界各国で「大学の国際化」に対する社会からの要求が高まったからである。
- 社会からの要求が高まった背景：
 1. 世界大学ランキング等による「国際競争力強化」の要求の高まり
 2. 国内の「国際化」の進行による、大学の「教育の国際化」への要求
 3. (財政面からの要求)

(まとめ) 日本の大学の国際化への示唆

- 日本では「大学の国際化」に対する外圧がそれほど高まっていないので、未だ必然性を伴う課題となっていない。
 - 日本では国内の国際化(人種的多様性、政治・行政・産業等における国際連携、国民等の国際化に対する意識の深化)が十分に進展していない。
 - (国際競争力強化に対する強い願望は明治維新以来、ずっと持ち続けているもので、近年になって特に鮮明になったということはない)
- このため、世界の大学ほど大きな進展・取組を見せていない。また、この状況は早々には変化しない。
- ...しかし、「大学の国際化」を逆手にとって、戦略的に模索する大学が出てきてもよい。

さいごに...

- 東京大学国際連携本部ホームページ
 - 海外大学等の情報
 1. 海外大学基本情報
 2. 海外大学等の国際化の動向
 3. 海外大学等調査報告(学内のみ)

(<http://dir.u-tokyo.ac.jp/kaigai/index.html>)

Thank You!